

『総合文化研究』第二号刊行にあたって

東京外国語大学総合文化研究所長 西永良成

『総合文化研究』第二号を刊行する運びになった。

まず、この第二号の巻頭を一九九八年度ノーベル文学賞を受賞されたポルトガルの作家ジョゼ・サラマーゴ氏の特別インタビューで飾ることができたことを喜びたい。このような貴重なイニシアチブをとられた岡村多希子先生に敬意を表し、大いに感謝したい。

本号の特集は「東アジアの文化と文学」である。この編集に中心的な役割を果たされたのは朝鮮文学の三枝壽勝氏であり、氏の他小林、岡田、柴田の三名の方々のご尽力により、本号は昨年の創刊号にもまして、実に多種多様で興味深い寄稿に恵まれた。日本文学を「国民文学」ではなく、東アジアというより大きなコンテクストの中に位置づけ、この地域の文学、文化を全体として捉えてみようとする試みはきわめて示唆的であり、また本研究所ならではの企画だと言えよう。

トランス・カルチュラルという概念は、当然ながらトランス・ナショナルという認識を前提とする。東アジアを対象とする本号の特集もこの認識をふまえたものだが、このトランス・ナショナルな認識はまた、執筆者の顔ぶれにも如実に伺われる。日本人が日本語で日本、中国、朝鮮、モンゴルの文学を語るのみならず、中国人、ロシア人が日本語で日本文学を論ずる。あるいは、フランス人がフランス語で中国思想を、中国人が中国語で中国文学を考察し、朝鮮人が日本語で北朝鮮の現代文学を紹介する。また、特集とは別に、日本人がフランス語でフランス一八世紀のテクストを精緻に分析する等々。

このように本第二号を眺めてみると、我々の『総合文化研究』の未来に向けた確かな展望もまた、おのずから拓けてくるように思われる。すなわち本号によって、トランス・カルチュラル、トランス・ナショナルにくわえるにマルチ・リンガルという方向がかなり明瞭に浮かび上がってきたということである。「ゆっくり急ぐ」「遅くても、着実な歩みで」をモットーとする本誌が、そのような方向を見据え、開拓するならば、今後ますます充実した内容をもち得ることが確実に期待できると信ずる。

終わりに、この『総合文化研究』第二号の編集に様々な立場から参加され、協力された多くの方々に、所員を代表する形で、衷心より感謝の気持ちを表したい。